
気まぐれ猫の散歩

月猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気まぐれ猫の散歩

【Zコード】

Z3341Z

【作者名】

月猫

【あらすじ】

人に疎まれ、苦しい思いをしてきた、元猫・現在妖怪の彪ひょう、妖怪や、靈が見えてしまい、気味悪がられてきた両親のいない少女、ほたる。

そんな2人が出会いつて、いろいろと学んでいきます。

記憶（前書き）

初めまして。月猫いねねこです。
思いつきで書いてるので、べのへりご続くかペリローですが・・・
宜しくお願ひします。

辛い事、悲しい事、いろいろあつたさ。人は、嫌いだ。ずっと一緒に言つて、優しいフリしてすぐ裏切る。もう期待して、裏切られるのはごめんさ。なのになぜ、こんなことになったのかな・・・？誰か教えてよ。

私の名は、彪ひょう オス。1番最初に、飼つてくれた人がつけてくれた。1番はじめに飼つてくれたのは、年老いた、おばあさんだつた。わたしは、まだ子猫だつた。この人は優しくしてくれた。まだ目も開かないうちに捨てられた私を。幸せだつたけど、そう長く続かなかつた。おばあさんが死んでしまつた。引き取り手がないわたしは捨て猫となつた。

そうしているうちに、今度は男の子に拾われた。大切にしてくれたけど、大きくなるにつれて、相手にしてくれなくなつた。そして、疎まれるようになつた。この時、わたしは4歳。男の子の家を飛び出し、再び、捨て猫となつた。

次は、大人の男に拾われた。男は一人暮らしをしていた。アパート暮らし。狭くて、汚い部屋だけど、仲良く暮らししていた。けれど世の中は、不景気になつていた。男は、会社をリストラされた。1日中家について、段々と私にハツ当たりするようになつた。酒癖も悪くなつていつた。ある日、いつものようにハツ当たりされた。抵抗したけど、意味は無く・・・。そして私は死んでしまつた。私が7歳の頃。

死んでもらも、死にきれず、ついに・・・。妖怪となつてしまつた。妖怪となつた私はもう、猫ではない。真っ白で、トラック1台分はある。耳は後ろに倒れ氣味で、尾は長く、フサフサ。大犬の姿に似

ていた。それでいて、猫の姿おとこにも戻れる。白くて、丸い姿に。尾は、丸くて短いけれど。何やら妖力おとからも強いようだし……。これなら、もう、人の世話になんかならなくて済む。私は自由になつた。

せたるの#貼りみ（福書）

更新遅れて、すみませんでした。
これからもいろんなことがあつたりするかも知れませんが、よろしく
お願いします。

ほたるの話しみ

5歳の頃、私は両親を亡くした。

五ヶ瀬ほたる。中学2年生。

わたしには、秘密がある。それは、この世の者でないもの。信じてもらえないだらうけど、妖怪や、靈が見える。

両親を亡くしてからは、親戚を転々としてきた。しかし、わたしは妖や靈を見る、不気味な子。周りの人から見たら、嘘つき、氣味悪い、変な子、というふうでしかない。そのため、だれもきちんと引き取ったがらなかつた。

今住んでいる家の人は、母方の遠縁。今までにないくらい、優しい人たちだつた。こんなにいい家はない。ずっとここにいたい。この人たちに、不気味な思いはさせたくない。そう思つて、妖怪や靈を見る事は、秘密にしている。

けれど、家にいたら、いつかその事がバレそうで・・・。学校が終わると、近くの森の中で過ごす事が多くなつた。

またの頃（後書き）

感想待つてます

出会った

今日は、雨が降っている。普通だつたら、森になんか行かない。ほ
たるは、森の入口で立ち止つた。

普通だつたら・・・。

そう思つていたのに、森の中に入つて行つてしまつた。

来てしまつた・・・。

とにかくため息をつくしかない。まあ、雨も少ししか降つていない
し、少しくらい良いか。

その時だ。

ドスン！――！

後ろで音がした。ドキドキしながら、恐る恐る振り向く。そして悲
鳴を上げそになつた。思わず腰が抜けた。後ろにいたのは・・・。
大きな獣だつた。白くてとにかく大きい。目は、銀色。耳が後ろに
倒れ氣味。尾がとにかく長い。

「む。なんだ、人の子か」

低い声。多分これは・・・。

「妖怪なの？」

「当たり前だ」

そりや、そりや、どうだらう。これが、普通の動物なわけがない。

「お前には、私がみえるのか？」

「まあ・・・」

話も出来るし、見えている。

「雨が降つてゐるのに、何をしている」

そこまで来て、やつと落ち着いた。はたるは立ち上がる。

「関係ないでしょ」

「ふん。ふてぶてしい奴だ」

そんなこと、妖怪に言われたくない。

「あんたこそ、突然何よ」

「少し散歩していただけだ
そういえば、コイツには話が通じる。またね、もつ少し話してみ
ることにした。

稻荷神社で・・・。

雨がやんだ。ほたるは傘を閉じた。

「さつさと帰れ」

大きな獣が言った。

「なによ。ここにいてはだめなの？」

ムツとしたように聞いた。

「お前、人間だろう？私が怖くはないのか？」

「そりゃあね。怖いけど。でも、私の事を食べたりしないでしょ？」

大きな獣がため息をついた。

「ふふ。妖怪とこんなに長くはなしたの、初めてだよ。あんた、名前は？」

大きな獣はじつとほたるを見つめた。そして突然・・・。

どろん

小さな猫になつた。

「わあ・・・。なんなの？その姿」

「気にするな。どちらも本当の姿だから。私は彪だ」

「私、ほたるつていうの」

猫姿になると、あまり表情が変わらない。

「では、ほたる。人の子があまりここへ、一人で来るんじゃない」

「なぜ？」

「ここには妖が多い。見えるお前など、食われてしまつかもしれないぞ」

彪は口を細めてからかうような口調で言った。

「そうなの？忠告ありがとう。でも、ここはわたしの大切な居場所でもあるの。・・・ねえ、明日も来ていい？」

「私はここへは来ないよ」

そう言われても、ほたるは来るつもりだった。それが彪にも伝わっている。

「バイバイ、彪

ほたるは手を振つて別れた。

帰り道。かなりテンション高めで歩いていた。

「そこの人の子」

突然横から声がした
ほたるかき？Nも、Nじた

一不乎しが

精一杯叫んでいる声のする、
さな祠のある稻荷神社だった。

「おーーーーーい。人の子ーーーーー」

「誰かいるの？」

ほたるは恐る恐る、足を踏み入れた。そして、祠の前に来た。

「え――つと・・・」

「ううん、だんだん」

「ふう。かつ、ハラゲ付ニシモト下の方からだ。下を見ると、

「・・・わあああああああ！？・・・と。小さな妖怪か！」

祠の下には、着物を着た小さなおじさんがいた。じついうのにも、

「河か用？」
もう慣れた

「うーむ。やつぱり、見えるのか」

おじさんが言つた。

見えぬよ 私はほたる ··· ··· 君の名前は?」

力を貸す？今までそんなこと、言われたことない。

「……厄介なことじや、ないよね。あまり関わりたくないような・

13

「そんなこと言はずに。忘れられたこの場所に住んでる、わたしのたつた1つの願いなのだ」

葛の木は泣きながら言つた

「分かつたよ。何すればいいの？」

「おお。ありがたい。手伝ってくれるか」

葛の木は大喜びしている。ほたるは、はあーっとため息をついた。

稻荷神社で・・・（後書き）

どうだったでしょうか。感想、意見頂けたら嬉しいです。

彪が猫姿の時の姿には、いろいろ理由がありますが、私の想像した
のだと・・・。

尾が短いのは、野良猫時代にケンカして・・・。ということです。
街中でそういう猫がいると悲しくなります。太っているのは、人間
から解放されて、沢山美味しいものを食べたから、という設定にし
ています。

また、読んで頂けると嬉しいです。

忘れられた場所

「それで、何をすればいいの？」

「まあ、話を聞いてくれ。……おつとその前に……」

葛の木は、祠の奥に行き、戻ってきた。

「……何？そのお面……」

葛の木は、狐のお面をしていた。

「失礼な。私は狐の神なのだ。面をしたままでは失礼だから、面を外して挨拶したのだ」

「えー————！？かつ……神様だったの！？くつ……葛の木様……」

「ああ。タメ口、無礼三昧……。祟られる……。

「はは。気にしなくていいぞ」

なんて心の広い神様なのだろう。

「実はね……。ああ、ちょうど来た」

「ちょうど来た？」

葛の木様が見ている方には、若い女人だ。

「まさか、あの人人が好きだから、告白したい……とか？」

「阿呆。違う。まあ、見ておれ」

「あら。ここにちは」

突然、後ろから声がした。振り向くと、若い女人だった。

「こ・・・こにちは」

慌てて返す。

「見る。この人を……」

葛の木様は、ヒソヒソと言った。言われたとうりにする。そして、ビックリした。

「見えるか？」

黙つてうなずく事しか出来ない。女人は、お供え物をして行つてしまつた。

「な、な、見えただろ？」「

「うん」

女の人に憑いていたもの。それは・・・。

「あれは・・・。妖怪？」

「そうだ」

黒くて、恐ろしい妖怪だった・・・。ほたるは葛の木を見つめた。葛の木は語りだした。

あの女人人は、若菜さんといつて忘れられたこの場所を唯一拝んでくれる人。ところが最近、妙な妖怪に憑かれてしまつたのだ。

「あのままで、若菜さんの命が危ない。あやかしそんな時、お前を見かけたんだ。人の子のくせに、妖力の強いお前に目をつけていたんだ」実際、若菜さんは力が弱まっている感じがした。

「で？どうしてほしいの？」

「あの妖怪を、追い払つてほしい」

「えつ！？」

追い払う？そりゃあ、出来るならやってあげたいけど・・・。

「『めんだけ』、私、そんなこと出来ないよ

「なぜだ。お前ならできる。お願いだ」

葛の木様は泣いている。

「私は、陰陽師とか、神社の神主とか、尼さんとかじゃないんだよ

「うう・・・・・・」

葛の木様は、ワーワーと泣きだした。ほたるも泣く子にはかなわない。

「分かつた。分かつたよ。出来ることはやるから」

結局、昨日と一緒に流れだよ。それにしてもさつき、若菜さんに憑いていた妖怪・・・。何か、変な感じがしたな・・・。どうしてだらう・・・。

悪靈祓い その壱

翌日。

「おーい。葛の木様——」

学校帰りに、稻荷神社へ寄つてみた。葛の木様は、祠の前に座つていた。

「こんにちは。葛の木様。・・・若菜さん、来た?」

「おお。ほたるか。まだ来てないぞ」

葛の木様は、少々退屈そう。

「そうだ。葛の木様、飴いる?」^{レフ}そり鞄に入ってきたんだ」

取り出したのは、イチゴ味の飴玉。

「ルール違反はいけないぞ」

そう言いながらも、嬉しそうに飴玉を受け取つた。

「甘つ。甘くて、美味だ」^{びみ}

意外に食いしん坊な一面もあるのだ。そんな事をしていると、若菜さんが来た。

「こんにちは」

若菜さんが言った。

「こんにちは」

ほたるも返す。

「あなたもお参りに?」

「ええ。・・・まあ」

まさか、葛の木様とお話に来たなんて言えない。若菜さんは、ゴホッゴホッと変な咳をした。背中には相変わらず、妖怪が憑いている。若菜さんは、綺麗な花をお供えした。葛の木様は、ほたるの肩に乗つて、若菜さんを見つめていた。

「ふふ」

若菜さんは、一人で笑つた。

「『めんなさいね。思い出し笑いをしてしまった』

そして、少し悲しそうな顔をした。

「私、10歳のときに母を亡くしているの。」田代は、母との思い出の場所でね。・・・母が亡くなつた時悲しくて田代で泣いていたら、誰かに頭を撫でられたの。顔を上げたら・・・」

「狐の面をした、男の人がいたの。その時はビックリして、逃げ帰つてしまつたけど・・・。もしかしたら、この祠に住んでいる神様

それだけ話して、帰つて行つた。ほたると葛の木は、若菜さんの後

「そんなことをしたの？」

「ああ。若菜さんはす」く悲しそうに泣いていたからね。慰めてあげたくて。私は、笑つている若菜さんが好きだからね」

「ん？ 何か言つた？」

「何を言っているんだ？」

やつぱつ！

「うむ、この気配、あの妖怪じゃ」

聞いた時

ホシイ
チカラガホシイ

シユツと妖怪が来るのが見えた。若菜さんに憑いていた・・・。

ほたるは、
葛の木様を乗せた

ああ。やはり来ていいか。彪は、昨日、ほたると出会った場所に

来ていた。しかし、ほたるはいない。何、人間のことなんて信じて
いるんだか。やっぱり帰ろう。

ハアハアハアハア

声が聞こえる。・・・・・声？

ハアハアハアハアハア

ガサガサガ

サ サクサクサク

誰か走つてくる。・・・この匂い。・・・あッ！！！

ハアハアハアハア

「あッ。彪！！！」

ほたるが走つてきた。その後ろから來るのは・・・。

「あッつ

「彪・・・なんか・・・追わ・・・れて・・・て」

ほたるは息を切らしてゐる。

「もーーー。何やつとるんだ」

彪は、追い払おうとした。しかし、妖怪の方も逃げ足が速い。

「ギャッギャッ」

妖怪は、逃げて行つてしまつた。

悪靈祓い その弐

「で、今日は何を連れているんだ?」

彪が面倒そうに聞いた。

「これ?これは、葛の木様。くずのき 稲荷神社の神様」

はあ、とため息をつく彪。

「彪。お願いがあるの。実は・・・・・」

ほたるは彪に、事情を話した。

「なるほどな」

彪は、明らかに面倒そう。ほたるは、ずっと氣になっていた事を聞いた。

「葛の木様って、神様でしょ?妖怪を祓うことなんて、簡単でしょ?」

葛の木様は、ため息をついた。

「信仰の薄れとか、まあ色々で、おから 妖力が弱まってしまったのさ」

「それで。あんな悪靈をほたるに祓つてもらおうとしたのか・・・・

・・

「悪靈! ? 悪靈だつたの?」

ほたるは驚いた。

「しかも。あいつ、鬼水晶持つているだらう」

彪が、ニヤリとした。

「鬼水晶?」

「昔、この辺を荒していた鬼共を退治しようとした、陰陽師がいたのさ。だけど鬼共の妖力が強くて、結晶となつて残つてしまつたのさ。それが鬼水晶。手に入れると、妖力が強くなる、あやかし 妖達の宝玉なのさ」

ほたるは、葛の木様を見た。

「そんなの、祓えないに決まつてるじゃん」

葛の木様は、面を付けていて表情が分からぬ。

「ん―――。あ、そうじゅ。これを使つといふ
そつ言つて袖から何か取り出した。取り出すと、ショット大きくな
つた。

「・・・・！」だ。・・・でもね、私撃てないよ
「何――――――！？」

葛の木様の驚きは、半端ない。

「そんなこと言わないでおくれよ」

「そんなこと言つたつて・・・・・
はたるはため息をついた。

「鬼水晶をくれるなら、手伝つてやつても良い」
彪の一言に、ほたるも、葛の木も目を輝かせた。
「もらつていいくから、力を貸して」
「若菜さんを助けてくれ――――

こうして、2人と1匹の悪霊退治が始まった。

「あー、メジな井だがー

「まだだよ。つていうか、何で、彪と葛の木様が家にいるのよ」

「人間の手」云々

彪は恩着せがましそうに言つた。

萬の本様の圖書は、此の後ヨリ一冊も

「そんな・・・ことは・・・」

かへて 被林たもの
寝ねなし

「もう寝るから、静かにしてよ」

「うめすみ」
「ほたるは 静かは」というところは力をひねって言った

布団に入つた途端。

「お食を」

葛の木様と彪が、

「まごまごさま」

『ノルマニ...』

ほたるに怒鳴った
今日だけならまだしも
昨日も
一昨日も……

「わへ、ちやんちきするなら、外でやつてよ」

「何たよ、かたじこと言ひな

「当たり前よ。毎晩毎晩、寝不足で・

「前より毎晩寝不足で、」

「すまんなあ、ほたる」

葛の木様が謝つているけど、今日は言わしてもいい。ほたるは息を吸つた。

「とにかくね。静かにして。それが出来ないなら、出て行つて「すみませーーん」

彪と葛の木様が、声を揃えて言つた。ほたるは布団にもぐつた。最初こそは、静かだつたけど段々と・・・。

「ギャハハハハ

「やんや、やんや」

うるせくなつた。ほたるはイライラした。

「出て行け。この酔いどれ」

と、1人と1匹を、窓からポイ捨てした。

次の日。この日は、土曜日で学校は休みだつた。ほたると、彪は葛の木様と一緒に、若菜さんを待つていた。そして、この日も若菜さんは花を持って現れた。悪靈は、相変わらずだ。若菜さんも、具合悪そう。花をお供えすると、さつやと帰つていつた。

「あの女、今日が山場だな

「山場！？死んじやうの？」

「よし、あれを実行しよう」

彪は意識を集中する。彪は、相手の妖力を少しだけ、コントロールすることが出来るらしい。

「チカラガホシイ」

悪靈が、すごい勢いでこちらに来た。

「走れ」

彪の言葉に、ほたるも走りだす。葛の木はほたるの肩に、乗つかている。

「いいか。ある程度まで、悪靈を引きつける。そこで、お前が弓を撃つんだ。鬼水晶めがけて」

「うん。・・・撃つた事ないから、成功するか微妙だけど・・・」

「水晶持つていたって、低級は低級。ま、外したら、私が鬼水晶を

取りに行くぞ」

彪もほたるもかなり息が上がっている。
絶対に、悪霊を退治しなくては。

悪霊退治 最終話

ハアハアハアハ
息が切れる。

ザアアアアアア

川の流れる音がする。

「ほたる、川まで走れ」

彪も息が切れている。

ハアハアハアハア

川まで走つてきて、ほたると彪は息を整えた。
どろん

彪は、大きな獣姿に化けた。とにかく大きくて立派だ。銀色の目も、威厳がある。

「そろそろ来るな」

低い声も、いつもより恐ろしさを感じさせる。

「チカラ・・・ホシイ」

「悪靈くずのきが来たぞ、ほたる」

葛の木くずのき様が、ほたるをつづいた。ずっと肩に乗つっていたから、疲れていないのだろう。

「ほれ、これを使うんじゃ」

弓と矢を取りだし、ほたるに手渡す。

「矢は、予備が1本しかないからな」

「・・・なんか、半端な数ね」

「チカラ・・・クレ！！」

悪靈が姿を現した。

「来たな、悪靈」

彪が、ピカッと光を出した。白っぽい光が発せられる。この光には、

相手の妖力を吸い取る妖力ちからがあるのだ。

「ウワアアアアア・・・。コワイ、コワイ」

光が消える前に、ほたるは彪の背に乗った。

「ギャツギャツ」

悪靈が目をふぞろいでいる。光が消えると、弓を引き絞つた。撃てる
か分からぬけど、もうやけくそだ。

パン

矢が放たれ、悪靈に当たった……と思つたら、外してしまつた。

「ヨクモ・・・オノレ・・・。オノレーー！」

悪靈が飛びかかってきた。

「くそう・・・。鬼水晶の妖力ちからで、回復が早い。・・・これじゃ、
近付くのも危険だ」

彪は、ほたるを乗せたまま空を飛んだ。

「わあ。空、飛べるの？」

「当り前だ」

「感心してゐる場合ぢやないぞ、ほたる」

葛の木様が、ほたるを叩いた。

「そうだ。どうしようつ・・・」

「矢なら、もう一本あるだ」

葛の木様が、矢をほたるに渡した。だけど、撃てる自信が一気に無
くなつた。

「ええい。悪靈が追つてきている。やつやとどひめをやむなこと」

彪も焦つてゐるけど、ほたるもかなり焦つてゐる。

「どうしようつ・・・」

遂につぶやいてしまつた。

「私と彪が届くよつて、意識を飛ばせば、当たるかもしれんなあ
葛の木様の言葉に、彪もほたるもがくつときた。

「早く言つてよ」

2人で同時に、叫ぶよつて言つた。

「オノレ」

恐ろしい悪靈の声に、ほたるはドキついた。

「こぐぞ」

彪が正面から向かつた。ほたるが弓を引き絞る。当たれ、当たれ、当たれ・・・・・！

ひたすら念を込めながら・・・。

「いくんじや――ほたる――」

葛の木様が耳元で、叫んだ。

パン

矢が悪靈に向かつて飛んでいく。

トン

「ギヤ――――――・・・・・」

悪靈の悲鳴。矢が・・・。悪靈に・・・。鬼水晶に当たった。だけ

どそれと同時に何かが光つた。

まぶしくて、どこか不気味な、白い光・・・。

サッと、彪は飛びのいた。

「なんだ、あれは。すごく嫌な感じが・・・」

「ギ・・・ア・・・・」

悪靈は、光の中で悲鳴を上げながら消えていった。

「お・・・終わったよ」

ほたるはため息をついた。

「しかし・・・。結局、鬼水晶は見つかなかつたな・・・。ただ働きか・・・・」

彪も、ため息をついた。猫の姿に戻つている。

「ありがとう・・・。ほたる、彪、ありがとう。ありがとう」

葛の木が、涙混じりに言った。

「しようがない。ま、見つけたら教えるよ」

彪は鬼水晶のことを、まだ言つてゐるらしい。

「悪靈、殺しちゃつた・・・・」

「あいつは、正体を失つた悪靈だ。殺したことにはならないぞ。もしかしたら、成仏しちゃつたかもしれない」

彪の一言に、安心した。

とにかく。ほたるは、自分のチカラが初めて役に立つことが嬉しかった。これで、若菜さんの命は助かる。それに、彪も葛の木様とも出会えて良かった。妖怪のことはあまり好きにはなれないけど。これも、出会いの一つだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3341z/>

気まぐれ猫の散歩

2011年12月27日19時47分発行